

はじめに

「事件」としての「川の日ワークショップ」

「川の日ワークショップ」の企画の相談を受けてから、実施まで2ヶ月しかなかった。しかし、結果的には、無謀なる企てが何とかうまくいったのは、近年の川づくりをめぐる行政・専門家・住民の情熱あふれる努力の蓄積が背景にあったからである。

正直言って、川分野がこれほどに進んでおり、これほどに素晴らしい川まちづくり人が沢山おられるとは気付かなかった。これまでおよそ考えられなかったような異質な人との出会い、葛藤と融和の両者を経験し、何か根源的に新しい川まちづくりへの糸口を、ワークショップの現場でまざまざと見ることができた。

そこに集まっている行政・専門家・住民の誰もが川が好きの人たち。「川は好きやねん」のつぶやきが多様に響きあっていた。発表の中である人は、「川には権利があるんや」と一言つぶやいた。ドキッとした。

川には本来、生命がさんざめく清々しい水の流れがみち、縁には四季折々の個性的な風景が織りなされていき、人々が親しみ深く寄り添い、戯れる場所となりうる権利がある。権利の対抗概念は義務だが、義務といえば、おしつけがましい外的制約に聞こえるが、川を愛する人々は時をかけて、美しい対象を守り、汚れ荒れた対象を蘇らせたいという内なる責任意識を呼び覚ます。内発的責任意識にもとづいて、市民と行政の協働によって、川を保全・整備・開発することに赴く。ここには、未来の参加のまちづくりの構図がかいま見えていた。

効率化と基準によって一方的に管理する「システム」を土台から切り崩すような「文化」が「事件」として起こっている…とこの日痛感させられた。

ワークショップは「事件」が起こらないとワークショップではない。

この日は、確実に「事件」としてのワークショップであった。しかし、来年にむけての検討課題がいくつも見えてきたことも確かである。例えば、大都市部と地方の地域区分、住民参加の中身の吟味、ソフトだけでなくハードの内に踏み込む議論、プレゼンテーションの創意工夫、参加者の発言の機会づくり、地域予選から全国本選への流れづくり、などなど。

ともあれ、「いい川」とは何か、その「判断の根源的場所」としてのワークショップの持続的発展を期待したい。

「川の日」ワークショップ総合コーディネーター

千葉大学教授 延藤安弘